

甲子園浜におけるシギ・チドリ類の採食行動と干潟利用

平松山治 2年：榎真希・長田祐生子・畑山愛華
(武庫川女子大学附属高校)

目的および調査方法

シギ・チドリ類は、渡り途中のエネルギー補給の場である干潟をそれぞれが効率よく利用するために、体の大きさ・足の長さ・くちばしの形などを進化させたと考えられています。私たちは、種ごとの採食環境とくちばしの使い方、水中の餌を利用するならどの程度の深さを利用するのかなどを記録し、それぞれの種がどのように干潟を利用しているかを比較・検討しました。

結果

標準的な体型のシギ類3種、キアシシギ・ハマシギ・トウネンについては、体の大きさ（中型→小型）・足の長さ（長→短）・くちばしの長さ（長→短）の順に、採食場所が水深の深いと



キアシシギ



ハマシギ



トウネン



キョウジョシギ



チュウシャクシギ



ダイゼン



シロチドリ

ころから泥の表面に移行する傾向が高いことが解りました。頑丈なくちばしを持つキョウジョシギ、体が大きくて長く湾曲したくちばしを持つチュウシャクシギは共に岩場を利用していましたが、キョウジョシギは岩場の表面、チュウシャクシギは岩の隙間からカニなどの大型の餌を利用していることが解りました。チドリ類では、小型のシロチドリが同じ体型のトウネンと同じ環境を、大型のダイゼンはキョウジョシギ・チュウシャクシギと共に岩場を利用していました。

考 察

標準的な体型のシギ類3種、キアシシギ・ハマシギ・トウネンでは、足・くちばしの長いものが干出した干潟の汀線の水側を、足・くちばしの短いものは汀線の陸側を利用し、同時的な餌による競合をさけるために干潟を「棲み分け」によってうまく利用しているようでした。特殊なくちばしを持ったキョウジョシギ・チュウシャクシギでは、前述した3種とは違う環境を利用し、それぞれのくちばしの特徴を活かした「食い分け」を成立させているようでした。また、チドリ類では、小型のシロチドリがトウネンと同じ環境を、大型のダイゼンはキョウジョシギ・チュウシャクシギと同じ環境を利用していましたが、シギ類ではくちばしの触覚で餌を探すのに対し、チドリ類では視覚で餌を探すため、結果的に餌の種類を変えているかもしれません。

以上の結果は、シギ・チドリ類が、春と秋の渡りの短い期間に、それも干潟が干出している短時間に、多くの種が餌の競合をさけて共存できるよう、この干潟を舞台として、体の大きさ・足の長さ・くちばしの形・採食法などを進化させたということを表しているのではないかと考えています。